

# 方言教材開発のための熊本方言分析の試み —文末詞タイと、接続助詞ケンについて—

鹿児島大学留学生センター 和田 礼子

## 1. はじめに

方言教材開発にあたって、まず熊本方言の文法について整理する必要がある。そして、その記述は、外国人に対する日本語教育の文法のように「使うこと」を目指した記述である必要がある。

個別方言の文法記述の手法として井上（2002）では「既存の分析（特に標準語の分析）が応用できるところは、できるだけ既存の分析を応用する」（p143）ことを主張している。さらに「標準語などを含む、より一般的な枠組みの中でとらえるべき部分」と「その方言個別の問題としてとらえるべき部分」の見極めの重要性も述べている。

本研究は共通語研究の成果を熊本方言タイ及びケンの分析に用い、その用法について概観するものである。方法としては熊本方言タイ、およびケンがどのような共通語と置き換えが可能であるか、置き換えることのできる用法と、置き換えることのできない用法は何かについて分析を進める。

そして、この分析に基づき、熊本方言教材「話してみらんね さしより！熊本弁」ではどのような解説を行っているかを提示する。

なお、2 節タイ、3 節ケンの文例にはそれぞれの節内での通し番号を付している。また、文例の中で分析対象の熊本方言はカタカナで表記し、それ以外の熊本方言には下線を付した。

## 2. 文末詞タイ

タイは熊本だけでなく、福岡、佐賀、長崎などでもよく使われている方言で、間投詞的にも終助詞的にも使われる。タイには次のような用法がある。

### ①間投詞的用法

- ・昨日タイ、あそこの郵便局でタイ、山田さんに会ったと。

（昨日ね、あそこの郵便局でね、山田さんに会ったの）

### ②確認用法

- ・ほら、あそこにスーパーのあるタイ。（あそこにスーパーがあるでしょ？）
- ・去年、年末に忘年会ばしたタイ。あの店、昨日テレビに出とったよ。

（去年、年末に忘年会をしたじゃない。）

### ③提示用法

- ・ A：ねえ、あの人、だれ？  
B：えっ？ああ、あの人。山田さんタイ。（山田さんだよ。）
- ・ 明日テストのあるとタイ。（明日テストがあるんだ。）

・(いくら反対しても東京へ行きたいという息子に対して)

もう、東京でも、どこでも、好きなところに行くタイ。(好きなところに、行ったらいい。)

間投詞的用法は共通語のサ／ネに、確認用法はジャナイ、提示用法はヨ／ダ／サなどの終助詞に言い換えることができる。また、疑問文でタイが文末につくことはない。

タイは特定の共通語と機能・用法を等しくし、完全に置き換えられるという種類のことばではなく、タイ独自の機能・用法を持ち、それがあある場面では「ジャナイ」の用法と重なり、ある場面では「サ」「ダヨ」の用法と重なるものであると考えられる。本稿はタイがこれら共通語に置き換えられる場合と、置き換えることのできない場合とを分析することでタイ独自の機能・用法を明らかにすることを目的とする。分析の方法として、多くの研究成果が蓄積されている共通語のモダリティ研究の枠組みを用い、共通語との言い換えが可能かどうかといった観点からの分析を中心に行う。

本稿では、まず、2-1 節でタイに関する先行研究を概観する。次に 2-2 節では確認用法のタイをジャナイ等の確認要求のモダリティ形式と比較、分析する。2-3 節では提示用法のタイを、サ、ノダとの置き換えの可否を中心に考察する。

## 2-1 先行研究

タイの意味分析を行った先行研究には神部 (1992)、坪内 (1995ab)、坂口 (1998)、前田 (1999)、藤本 (2002) などがある。神部 (1992) は九州方言としてのタイを、坪内 (1995) は福岡市博多方言のタイ、坂口 (1998)、前田 (1999) は長崎方言のタイ、藤本 (2002) は熊本県菊池方言のタイを分析の対象としている。本研究では熊本方言のタイを分析対象としている。熊本方言のタイと他方言におけるタイとは微妙な点で違いがある<sup>1</sup>が基本的な用法には共通する点が多い。このため、これらを先行研究として位置づけることは妥当であると考えられる。

タイの先行研究を見ると、その多くはタイとバイを比較する形で進められている。バイとタイは文末で同じような場面に使われることが多いが、その意味機能は異なるというのが先行研究の一致した見解である。坂口 (1998) はバイについて「話し手の感情を直接に表す文末詞の代表」「自己の判断の確認やそれを相手に穏やかに教示する場合が多い」としている。これに対しタイは「客観性の強いことがら、自明のことがらを言明する時に用いられることが多い」としている。しかし、タイは (1) のように、客観的事柄とは言えない次のような文にも用いられる。

(1) (私は) 悲シカバイ／タイ。

藤本 (2002) ではバイとタイの両方が使われる (1) について、次のように分析している。「悲シカバイは心情の吐露として自然である。悲シカタイは心情を客観的に説明する形になっている。」「心情の吐露のみならば悲シカバイの方がふさわしく、悲シカタイは極端に言えば、どこかよそごとの響きがある。」(藤本 2002 p 252)。また神部 (1992) は、タイには話し手の判断・意図を普遍的に規定しようとする機能があり、このことが冷淡さを感じさせる理由であるとしている。

一方、坪内 (1995a) の分析は談話管理理論を用いたもので、タイは現場の事象が話し手の「記憶・常識世界」と同一であることを表し、そこから「当然」といった意味が派生するとしている。坪内 (1995a) の記述を井上 (2002) は「話し手にとっての既定事項の提示」とまとめなおしている。

以上、先行文献で示された、「タイは一般的、客観的な事実を述べる際に使われる」という主張と、「タ

イの機能は既定事項の提示である」という主張は矛盾しておらず、同一のものであると考えられる。本稿でも、タイの機能は「話し手にとっての既定事項の提示」であると捉え、具体的な用法について考察する。

また、先行研究ではタイとバイの比較分析が中心であったが、本研究では共通語の終助詞や、モダリティ形式との比較を行う。異なる角度からの分析が、より詳細なタイの分析につながると考える。

## 2-2 タイの確認用法

### 2-2-1 ジャナイカとの共通性

本節ではタイの確認用法について考察する。確認用法のタイはジャナイ／ジャナイカに置き換えられることが多い（以下ジャナイカと表記）。ジャナイカには推量と、確認要求の用法があるが、タイに置き換えられるのは確認要求の用法である。

共通語における確認要求表現には「ダロウ」「ジャナイカ」「ネ」がある。蓮沼（1995）は「ダロウ」「ジャナイカ」「ヨネ」の確認用法についてこれらが置き換え可能かどうかという観点から考察しているが、この枠組みにタイを当てはめて考えてみることで、タイの特徴を明らかにする。以下、蓮沼の例文を熊本方言に置き換えてみた。

#### ①共通認識の喚起（「ダロウ」「ジャナイカ」「ヨネ」共通の用法）

(2) あそこに郵便ポストの見ゆっタイ。そんすぐ先の角ば右にまがって。

(あそこに郵便ポストが見えるでしょ。そのすぐ先の角を右にまがって。)

(3) 同級生に加藤さんっておらしたタイ。背の高か人。

(同級生に加藤さんっていたじゃない。背の高い人)

この用法で使われるタイは上昇イントネーションで発話される。

#### ②認識形成の要請

(4) だけん言ったタイ。あん人には気をつけなっせて。

(だから言ったじゃない。あの人には気をつけなさいって。)

#### ③推量確認（「ダロウ」のみ）

(5) \*疲れたタイ。ゆっくり休んでね。(疲れたでしょう?)

(6) \*お母さん、遊びに行ってもよかタイ。(いいでしょう?)

#### ④認識生成のアピール（「ジャナイカ」のみ）

(7) 妻：このジャケット素敵でしょ

夫：うんなかなか似合つとるタイ。(似合つてるんじゃないか。)

(8) (開けてみたら中身が空なのを発見して)

なんね、空タイ。(なんだ、空じゃないか。)

#### ⑤相互了解の形成

(9) \*私、ゆうべ、眼鏡、ここに置いたタイ。(置いたよね)

蓮沼（1995）は確認要求表現の機能を表にまとめているが(p399)、この表にタイを加えて整理したものが表1である。

表1 タイと共通語の確認要求表現との比較対照

	ダロウ	ジャナイカ	ヨネ	タイ
共通認識の喚起	○	○	○	○
認識形成の要請	○	○	×	○
推量確認	○	×	×	×
認識生成のアピール	×	○	×	○
相互理解の形成	×	×	○	×

以上の考察からタイはジャナイカとの重複が最も多いが、ダロウにも置き換えられる用法もある。また、次の例のようにタイに置き換えられないジャナイカもある。

(10) 君、もしかして、行きたいんジャナイカ。

(11) \*もしかして、行きたいタイ。

次節ではタイで言い換えられないジャナイカ、ダロウを考察することで、タイの特性を考える。

### 2-2-2 タイで言い換えることができない確認要求

三宅 (1996) はデハナイカを推量の対象となるものの違いから「デハナイカ I 類 (知識確認の要求)」「デハナイカ II 類 (命題確認の要求)」の 2 種にわけ、その違いについて分析している。また 宮崎 (2000,2005) でも「デハナイカ」と「ノデハナイカ」を異なるものとして取り扱っている。宮崎 (2005) は確認要求形式を「聞き手依存型」か「聞き手誘導型」かで以下のように分類している。(p115)

	話し手の認識が対象	聞き手の認識が対象
聞き手依存型	ノデハナイカ、ネ	ダロウ
聞き手誘導型	デハナイカ	タロウ

「聞き手依存型」とは「話し手自身の認識が不確かな状況で確かな情報を有していると思込まれる聞き手の応答に依存してその情報の確定化を図る」タイプ、「聞き手誘導」は「話し手自身の認識が確かな状況で、聞き手の認識を誘導して共有情報の確立を図る」タイプの確認要求である (p112)。宮崎 (2000、2005) では「ノデハナイカ」を「聞き手依存型」の確認要求としている。

(12) 小暮さん、本当は部下の刑事が張り込んでいることご存知だったんじゃないですか。

(『古畑任三郎』(宮崎 2000p8))

(12) の「聞き手依存型」確認要求をタイで書き換えることはできない。前節でタイに置き換えることのできなかつた (5) (6) (7) (11) は、話し手の認識が聞き手の認識よりも不確かな状況で「聞き手依存型」ととらえることができる。(以下 3-1 の例文再掲)

(5) \*疲れたタイ。ゆっくり休んでね。

(6) \*お母さん、遊びに行ってもよかタイ。(「行ってもいいでしょ?」という意味で)

(7) \*私、ゆうべ、眼鏡、ここに置いたタイ。(「置いたよね」という意味で)

(11) \*もしかして、行きたいタイ。

また、次に示す(13)では自分の外見は自分では認識できないため、タイは使えないが、相手の外見については認識できるため(14)ではタイが使える。

(13) 俺、元気そう{ダロウ、\*ジャンナイカ、\*タイ}

(14) 君、元気そう{\*ダロウ、ジャンナイカ、タイ} (宮崎 2000 P9 の文例にタイを追加)

以上の考察から、タイは「聞き手依存型」ではなく「聞き手誘導型」の確認要求表現であると考えられる。「聞き手誘導型」の「話し手自身の認識が確かな状況」という要件はこれまで見てきた、タイの提示する内容の確実性、客観性といった要件とも符合するものである。確認要求の用法は基本的なタイの機能である「話し手にとっての既定事項の提示」の枠内にあり、場面に応じて「提示」が「確認」の意味を持つと考える。

## 2-3 タイの提示用法

### 2-3-1 サとの関連性について

タイは間投詞としても終助詞としても使われるが、共通語で同様の用法を持つものにサとネがある。サもネも間投詞的用法ではタイに置き換え可能である。文末で、サはタイに置き換え可能であるが、ネは置き換えが難しい。また、ネはタイネの形でタイに後接することができるが、サとタイは同時に使うことができない。同じ機能を持つ語が同時に使われることはないことから、タイとサは同じ機能を担っている可能性が指摘される。ここではサとタイの置き換えの可否を検討する。

富樫(2004)<sup>2</sup>で示されている文末サの中で次のような用法はタイに置き換えが可能である。

(15) A: これ {でしょ/ダロ} ?

B: そう {サ/タイ}。

(16) A: 昨日、行った {の/ト} ?

B: うん、行った {サ/タイ}。

(17) しなければいけないことを確実にこなしただけ{サ/タイ}

また、富樫(2004)は勧誘に対する答えにはサはつかないとして、次のような例を挙げているが、タイもサ同様、この文脈では使えない。

(18) A: 行こうよ。

B: \*いく {サ/タイ}。\*行こう {サ/タイ}

(「行くタイ」は勧誘に対する答えではなく、そんなことわかっている、わざわざ言うまでもないことだといった意味になる)

富樫(2004)はサの間投用法と文末用法の共通した機能を「相対的な確信の強さを効果的に聞き手に提示すること」としている。また、日本語記述文法研究会編(2003)では「「さ」は話し手にとって当然と思える内容を聞き手に説明しようとする伝達的な機能を持っている」(p249)としており、「って」などの引用形式に接続して「人の発言内容を話し手の主観を交えずに聞き手に伝える」という用法を提示してい

る (p251)。これは「当たり前であると認識していることを相手に提示する機能を持つ」(坪内 1995a p92) といったタイの機能と共通しており、タイに置き換えることができる。

(19) 佐藤さん、今日は来られないんだってサ。

(20) 佐藤さん、今日は来ラレンタイ。

このようにタイはサとの共通点が多いが、置き換えができないものもある。(21) (22) のようなサはタイには置き換えることができない。

(21) 亭主がアメリカ人なのだから、車に乗ってくる {サ/\*タイ}。富樫(2004)<sup>3</sup>

(22) 山田さんはたぶん来る {サ/\*タイ}。

(21) の「乗ってくる」、(22) の「来る」は推量で、どちらも客観的事実ではなく話者の認識を表している。(21) (22) は次のようにカモシレナイ、ダロウ<sup>4</sup>を補えばタイを使うことができる。

(23) 亭主がアメリカ人ダケン、車に乗ってくるカモシレンタイ。

(24) 山田さんはたぶん来ラストタイ。(来るでしょうよ)

このことから、サは単独で話者の認識を表すことができるが、タイはできないということがわかる。カモシレナイ、ダロウは当該事象に対する話し手の捉え方を表す認識のモダリティ形式であるが、(21) (22) のサはこの機能を担っていると考えられる。しかし、タイにはこの機能はないため、カモシレナイ、ダロウのない (21) (22) では使用できないのである。一方、サは「カモシレナイサ」「ダロウサ」という形での使用も可能である(日本語記述文法研究会編 2003 p251)。この場合のサは「聞き手に提示する」といった機能のみを担っていると考えられる。

またサは独話では用いられない(日本語記述文法研究会編 2003 p250) が、タイには次のような用法がある。

(25) (新聞の天気予報欄を見て) なんだ、明日は雨タイ。(なんだ、明日は雨ダ)

(26) (店の前まで行って) なんだ、休みタイ。(なんだ、休みダ)

(25) (26) は独り言として発話されるため、サに置き換えることはできない。タイが独話的に使われるのはこのような期待が裏切られるような「発見」を確認するような場合だけである。

以上、見てきたようにタイとサは置き換えができる場合と、できない場合があることがわかった。タイとサは機能においては「話し手にとっての既定事項の提示」という点で共通しているが、提示する内容については、タイは判断・推量を担うことができないことが相違点としてあげられる。また、タイにはサにはない独話的確認用法があるということも観察された。

## 2-3-2 トタイ (=ツタイ) とノダ

共通語のノの機能の一部を熊本方言ではトが担っていると考えられるが、トは「トタイ」だけでなく以下のように「トヨ」「トバイ」「トダロ」など、さまざまな文末詞に接続する。

(27) 用事があるトタイ。

(28) A : (遅れてきた友人に) どうしたト?

B : バスの遅れたツタイ。

(29) A : 山田、遅かね。(山田、遅いな)

B : どうせ、起きれなかったトダロ。(どうせ、起きられなかったんだらう)

(30) 多分、知らっさんトバイ。(多分知らないんだ)

共通語ノダは(27)(28)ではトタイ(=ツタイ。以下トタイと表記)、(30)ではトバイと言い換えられる。本節ではノダのさまざまな機能の中で、トタイに言い換えられる機能を特定することで、タイの特性を明らかにしたい。

ノダには説明のモダリティを表す機能と否定などのスコープを表す機能がある(日本語記述文法研究会編 2003 p195)。次のようなノダはスコープを表す。

(31) 私があいつを誘ったのではない。あいつが私を誘ったのだ。

(日本語記述文法研究会編 2003 p196)

トタイにはこのような機能はないため、タイに置き換えが可能なノダはスコープのノダではなく説明のノダであると考えられる。説明のノダを日本語記述文法研究会編(2003)は「聞き手への提示/話し手の認識」、また先行文脈や状況などとの関係という点から「関係づけ/非関係づけ」という二つの軸の組み合わせで4種類に分類している。(日本語記述文法研究会編 2003 p198)

(32)

- a. 私、明日は来ません。用事があるんです。(提示・関係づけ)
- b. あいつ、来ないなあ。きっと用事があるんだ。(把握・関係づけ)
- c. このスイッチを押すんだ！(提示・非関係づけ)
- d. そうか、このスイッチを押すんだ。(把握・非関係づけ)

これらを熊本方言に言い換えながら考察を進める。まず(32) a「提示・関係づけ」の後半部を書き換えると次のようになる。

(33) (私、明日は来ません)用事があるトタイ。(提示・関係づけ)

(33)はこれまで見てきた「話し手にとっての規定事項の提示」という機能面からも、話し手にとって確実な情報という用法の面からも要件を満たしている表現で、「トタイ」の典型的な使用例と言える。

次に「把握・関係づけ」の(32) bは次のようになる。

(34) \*きっと用事のあるトタイ。(把握・関係づけ)

「きっと用事がある」は推量表現であり、「話し手にとっての既定事項」とはいえない。この不確実性がタイの使用を妨げている。

しかし、「把握・関係づけ」に分類される文で客観的妥当性のある次のような文ではトタイの使用は可能である。

(35) バスで20分、それから電車で10分か。じゃあ、30分かかるトタイね。

しかし、この用法はトタイだけの用法ではなく名詞に接続する場合はタイ単独でも使うことができる。

(36) 3割引か。じゃあ1500円タイ。

また「把握・非関係づけ」の(32) dは次のように言い換えられる。

(37) そうか、こんスイッチば押すトタイ。(把握・非関係づけ)

(35)(36)(37)は、現実の場面、あるいは常識や過去の経験といったものから導き出された推論の帰結であり、話者にとっては事実と等しい認識を持って発話されている。把握の文の中でもこのように論理的必然性を伴うもの、話者にとって確実だと認識されることに関してはタイを使うことができると考えられる。

次に「提示・非関係づけ」の用法を見る。「提示・非関係づけ」の用法は(32) cの他(39)(40)のよ

うなものがある。これらを熊本方言で書き換えたものを以下に示す。

(38) こんスイッチば押しナッセ！ [命令] (このスイッチを押すんだ！)

(39) 実は、今日ここを発つんです。(発つトタイ。) [告白]

(40) きれいに書くんだよ。(書くトバイ／書きナッセ) [教示]

(39) はトタイを使って言うことができるが (38) (40) はトタイに書き換えることができない。これらの違いは (39) が「告白」で、話し手しか知らないことを聞き手に提示するという用法であるのに対して (38) (40) は「命令」「教示」で、聞き手への強い働きかけを表すという点にある。タイの用法に「柔らかな命令」(藤本 2002) があるが、この用法はトタイにはなく、動詞に直接タイが接続する形で現れる。

(41) そんなに気に入ったんなら、買うタイ。(買ったら?)

(42) (いくら反対しても東京へ行きたいという息子に対して)

もう、東京でも、どこでも、好きなところに行くタイ。(好きなところに、行ったらいい。)

(41) は聞き手の行動を強要するものではなく、話し手の考えを提示することで相手の行為を促すといったレベルのものである。高梨 (1996) は疑問形「シタラ」が表す「勧め」表現の特徴として「問いかけという形でたんにある行為を一つの選択肢として聞き手の前に提示するだけの形式であるため、意味的にいわば無色に近く、制限が少ない」(p10) と分析している。「買うタイ」は問いかけの形ではないが、意味としては「買ったら？」に極めて近く、働きかけ性の低い「提示」という機能を担っていると考えられる。

(42) は「行きたければ行くがいい。私には、もう関係ない。好きにしろ。」といった突き放したようなニュアンスが強い。これも、タイには相手に働きかけて相手の行為を促すという機能がなく、「話し手の考えの提示」にとどまっているからであろう。

「命令」でなくても、聞き手に事態を認識させようとするような強い働きかけをもつ (43) のようなノダは同様の理由でトタイで言い換えることができない。

(43) A : おまえは、ずる休みだ。

B : 何だって？ こっちは、39度の熱で、寝込んでたンダ。

(44) B : 何てね。\*こっちは 39度の熱で、寝込んどったッタイ。

以上見てきたように共通語のノダにはトタイに言い換えられるものと言い換えられないものがあつた。しかしそれは「関係づけ・非関係づけ」「提示・把握」といったノダの意味分類に起因するものではなく「事態の確実性」「働きかけ性」という点におけるタイの使用制限によるものであつた。

タイの基本的な機能は「話し手にとっての既定事項の提示」であり、これから外れるものはトバイやトヨなどによって表わされる。この現象は共通語ノダを構成しているダが担う機能の複雑さを顕在化させるものでもある。

## 2-4 教科書への応用「タイ」

以上、タイの基本的な機能が「話し手にとっての既定事項の提示」であること、用法の特徴として、話し手にとって不確かなことがらを述べる際、タイは使用できないことを指摘した。また、タイは命題めあてではなく伝達モダリティであると考えられ、他のモダリティ成分との共起も可能である。そして、伝達モダリティではあるが、相手への働きかけの度合いは低く、「提示」にとどまることが観察された。

共通語で、タイと全く同じ機能・用法を有する語はなく、いくつかの語の用法の一部をタイが担っていると考えられる。これらの分析を方言教科書ではコラムとして以下のように示した。

「たい」は熊本だけでなく、福岡、佐賀、長崎などでも使われている方言です。とてもよく使われる方言で、いろいろな使い方があります。

[相手が知らないことについて話す]

(質問に答える時)

1) A: ねえ、あの人、だれ?  
B: えっ? ああ、あの人。山田さんたい。

2) A: ねえ、シューカツて 何?  
B: 就職活動のことたい。(第1課)

(長い話をするとき、まだ話が続くことを示すサイン)

\* 聞いている人はよく「うん」とあいづちをうつことが多い。

3) A: 昨日、バスに乗ったたい。  
B: うん。  
A: そしたら、山田さんも同じバスだったけん、びっくりした。

4) A: いま留学してる友達がいるとたいね。  
B: うん。  
A: でも、まだ慣れなくて、ホームシックらしかとたい。  
B: ふーん。

A: で、なんか食べ物でも送ってやろうかと思って、「食べたいものは?」て聞いたとたい。そしたら、「ふりかけが 食べたい」って!  
B: へー。

[相手がたぶん知っていることを確認する]

・「ほら、～たい」の形でよく使う。

5) A: ねえ、「熊本飯店」って、どこ?  
B: ほら、銀座通りに 大きい中華料理の店があるたい。  
A: あ～、あるある。

・後ろに続く話題の前置きとして使う。

6) 明日から試験のあるたい。だけん図書館は人が多かよ。  
7) 去年、年末に忘年会ばしたたい。あの店、昨日テレビに出とったよ。

[自分の考えを言う]

8) (試合に負けた友達に)  
仕方ないたい。来年また、がんばればよかたい。

9) (怒っている友達に)  
そぎゃん怒らんでもよかたい。

10) (いくら反対しても東京へ行きたいという息子に対して)

もう、東京でも、どこでも、好きなところに行きたい!

8) 9) は「なぐさめる」「説得する」といった場面でよく使われます。10) は返事は聞きたくない、一方的に宣言するときに使います。

また、説明のニュアンスを持つ「～とたい」「～ったい」という形でも使います。

12) A: 忙しかと?

B: 明日試験のあるとたい。

13) A: なんで山田さんが今日欠席で知っとると?

B: さっき、メールの来たとたい。

\* 「たい」は名詞や、動詞と形容詞の普通体に接続しますが、「～だろう」「～よう」(意向形)にはつきません。

### 3 接続助詞ケンについて

ケンは熊本方言の接続助詞で、次のように使用される。

(1) 料理とかしきらんケン、困りそう。(料理とかできないから、困りそう) (データ)

(2) 月曜日からだったケン、そんな多くなかったけど、うん、でも多かった。(データ)  
(だったから)

(3) うん、頑張ってみるケン、じゃあ。(頑張ってみるから) (データ)

これらのケンはすべて共通語ではカラに置き換えることのできる。本稿では、研究の進んでいる共通語カラの用法と熊本方言ケンを比較考察することで、ケンの分析を試みる。共通語カラは先行研究では「理由を表すカラ」と「理由を表さないカラ」に分けられるが、ケンにこのような用法があるのか、カラとケンを置き換えることで、検証していく。

#### 3-1 ケンとカラの共通性

##### 3-1-1 理由を表すカラとケン

本節では先行文献で示されたカラの用法と、熊本方言ケンの用法を比較対照していく。まず、「理由を表すカラ」とケンについて考察する。理由を表すカラには次のようなものがある。

(4) 頭が痛いから、学校を休む。

(5) たくさん食べたから、なかなかお腹がすかない。

(6) 日曜日だから、家にいるでしょう。

「S1 カラ S2」のカラが理由を表す場合、S1 が S2 の原因である場合と、S2 に表わされた話し手の判断や意図の根拠である場合とがある。(庵ほか 2000) (4) (5) の S1 は S2 の原因であり、(6) の S1 は S2 の根拠である。これらのカラを、熊本方言のケンに置き換えてみると、以下のようになる。

(7) 頭の痛かケン、学校ば休む。

(8) たくさん食べたケン、なかなかお腹がすかん。

(9) 日曜日だケン、家におらすど。

このことからケンにはカラ同様、原因を表す用法と、判断の根拠を表す用法が認められる。さらに、カラは次のような終助詞的用法があるが、これも、ケンに置き換えることができる。

(10) (別れ際に) 連絡待てるから。

(11) 連絡、待とるケン。

また、理由を表すカラはノデと比較されることが多い。庵(2000)ではカラとノデの用法の違いをまとめている。これに、熊本方言ケンも交えると、以下のようになる。

①カラは話し手の判断を表すダロウに接続できるが、ノデはできない。

(12) 道が混んでいるだろう {○カラ/×ノデ}、早めに出発しましょう。

ケンも共通語の推量ダロウに相当する熊本方言「ど」に接続できる。

(13) 道の混んどるどケン、早めに出発しよ。

②理由を尋ねる質問に対して答える場合、カラを用いる。

(14) A: どうして図書館が混んでいるのですか。

B: 試験が近いカラです。

これはカラで表された理由は疑問文の焦点になることができるためである。

(15) 試験が近いから、図書館が混んでいるのですか。

ケンも理由を尋ねる質問に対する答えの文に用いることができる。また、疑問文の焦点になることができる。

(16) A: なんで図書館が混んどると?。

B: 試験の近かケンたい。

(17) 試験の近かケン、図書館の混んどると?

③後件が命令・勧誘・意志などのときはカラの方が自然。ただし、貢献が丁寧形のと  
きはノデも自然に使える

(18) 時間がない {○カラ/?ノデ} 急げ。

(19) 時間がない {○ですカラ/ノデ} 急いでください。

ケンも、後件が命令・勧誘・意志などのときでも使える。

(20) 時間のなかケン急ぎなっせ。

以上見てきたように理由を表すカラの用法はケンにも当てはめることのできるものであった。共通語では理由を表す接続助詞にはカラとノデがあるが、熊本方言ではケンだけが理由を表す用法を持っており、文末で終助詞的に使われる頻度も高い。

### 3-2 理由を表さないカラとケン

#### 3-2-1 理由を表さない「カラ」に関する先行研究

共通語カラの用法について詳細に分析したものに、白川(1991、1995)、許(1997)、鈴木(2000)等がある。許(1997)、鈴木(2000)はカラを「理由を表すカラ」と「理由を表さないカラ」の二つに分けた白川(1995)をふまえて、考察を進めている。本稿ではまず、白川(1995)で指摘された「理由を表さないカラ」の下位分類を紹介する。白川(1995)は「S1カラS2」という文においてS1が理由を表していな

い文として、次のような例を挙げている。

(21) すまないけど、書斎の机の上に辞書があるから、取ってきてくれ。(P189)

(22) 火曜日に返すから、ハンバーガー買うお金、貸してくれよ。(P189)

これらのカラが理由を表していないことの根拠として、白川はS1が「ドウシテ」という質問の答えになっていないことを指摘している。

(23) 父：すまないけど、辞書を取ってきてくれ。

娘：どうして？

父：\*書斎の机の上にあるから。

(24) ウィンピー：ハンバーガーを買うお金、貸してくれよ。

ポパイ：どうしてだい？

ウィンピー：\*火曜日に返すから。(Cf. 財布を忘れたから。)

このような「理由を表さないカラ」を白川は談話的な機能によって以下の3種類の用法に分類している。

#### ①「条件提示」用法

聞き手にとって、無条件では聞き入れることに抵抗のある依頼内容を、実行に移させるため、その抵抗感を少なくさせるための条件を提示する用法。

(25) すぐ返すカラ、お金貸してくれる？

(26) 一緒に行ってあげるカラ、早く謝ったほうがいいよ。

#### ②「お膳立て」用法

S1はS2を実行するための前提的な情報として提示される。聞き手はS1という情報を与えられなければ、S2を実行することができない。

(27) あ、モシモシ！東京の村岡ですけど…ハイ、10時30分の汽車に乗せましたから、よろしくお願ひします。(白川 1995 P195)

(28) [英語の試験の時に口頭による指示]

これから英語の文を読みますから、注意して聞いてください。(白川 1995 P196)

#### ③「段取り」用法

あらかじめ予定されている「S1→S2」という筋書きを、聞き手に提示するもの。

(29) 夜明けの四時に、タクシーが迎えに来てくれますから、それに乗って、途中、赤羽駅で彼を降ろして、そのまま、大宮駅まで、向井さんは僕と来てください。(白川 1995 P198)

(30) 式場でのお参殿や起立、着席等の指示はすべて式の世話役の典儀がやってくれますから、参列者はそれに従います。(白川 1995 P198)

「お膳立て」用法と、「段取り」用法はS1を知らなければS2が実行に移せないという点で共通しているが、白川(1995)は両者の違いを「「段取り」用法は、「S1→S2」という手順が示されている点に特徴がある」という。

白川はこれら、理由を表さないカラについて、S1カラS2という形式だけでなく、「S2、S1カラ」という倒置文、S2が表面に現れない「S1カラ。」という言いさしの形式で使われる場合についても、考察している。

以上が理由を表さないカラの3つの用法であるが、これらの機能について白川(1995)は次のようにま

とめている。(P212-213)

理由を表さない「カラ」の共通特徴

1. S2 には、かならず、聞き手に何らかの行為をするよう働きかける表現（命令・禁止・依頼・勧誘など）がくる。
2. S1 は、S2 を聞き手が実行に移すのを可能にしたり、促進したりする情報として提示される。
3. 「カラ」の談話的な機能は、新情報 S1 を聞き手の知識の中に導入することによって、それ以前の段階では聞き手が実行に移せなかった（前提的な情報の欠如のために、移そうにも移せない場合と、実行に踏み切るだけの好条件でない場合とがある）行為を実行可能な状況にすることである。
4. S1 は S2 を伴わなくても意味をなすことがある。（「言いさし」文）その場合も、実は言いさしているのではなく、談話的な機能は全うしている。

許（1997）は白川（1995）をふまえ、文末のカラについて考察している。許（1997）は「理由」のカラを「判断の理由」を表すカラ、白川（1995）の「条件提示」用法、「お膳立て」用法を「働きかけの理由を表す」カラと呼んでいる。そして、文末表現においては「判断の理由」を表すカラには、相手に働きかける機能がないことを指摘している。

また、許（1997）は文末に現れるカラのモダリティ的用法について分析している。まず、「判断の理由」を表すカラには説明のモダリティのノダに似た機能があると指摘する。次の例は、命題間の統合的關係から相手に暗黙の了解をしてもらうという用法で、許（1997）は、このカラは「説明のモダリティ」成分を有しているとしている。

(31) 実：なんにもいわないじゃない。

知子：いちいちいうと、あんたうるさがるから。（許 1997 P80）

また、「働きかけの理由を表す」カラは「伝達態度のモダリティ」と似た要素をもつと指摘している。

(32) 良雄：（顔を出し）お兄ちゃん。

耕一：うん？

良雄：ご近所から苦情が来るから。

耕一：なんで？

良雄：九時前からダンダンガンガン。（許 1997 P80）

(33) 綾子：フレンチトーストにミルクティ

実：そんなもん食えっかよ。

綾子：栄養あるから。（許 1997 P80）

許（1997）は（32）（33）のカラについて「何か新しい情報を理由として取り上げて、相手に現在の行動をやめさせたり、相手の行動の実行を促すために使われている」ことから、これらのカラは相手への働きかけという機能を持つとしているが、これには違和感を感じる。これらのカラが提示しているものは「働きかけの理由」であり、働きかけそのものを表しているとは捉え難い。（32）（33）で暗に示されている働きかけの内容は（32）では「(大きい音をたてるような) 行為をやめさせる」であるが「ご近所から苦情

が来るから」が働きかけを担っているとするなら「九時前からダンダンガンガン」という発話も同様の機能を持っていると言え、すなわちそれは、カラが担っている機能ではなく、状況と発話内容から認識される発話の意味であるといえる。(33)では「食事を促す」ことを働きかけているが、この働きかけは「フレンチトーストにミルクティ」

という綾子の発話で表されており「栄養あるから」は働きかけを補強する役割と考えられる。まさに、「働きかけの理由」という役割である。このことから、カラが伝達のモダリティ的成分を持つという論には賛同できない。

しかし、文末に使用される S2 を伴わないカラは、文脈や状況と S1 の事態を関連付けるという機能は確かに認められる。これは、ノダの説明、関連付けの機能と共通していると考えられる。これらのことから、本稿では、文末カラのモダリティ機能は説明、関連付けであると考えられる。

許(1997)はさらに終助詞ネ、ヨと文末カラの共起関係を調査し、「判断の理由」を表すカラにはネ、ヨが付くが「働きかけの理由」を表すカラにはネ、ヨが付けられないことを指摘している。

(34) 実 : いつ来た?

綾子 : 十五分ぐらい前。

実 : 学校は?

綾子 : 出席とらない講義だから (ね)

(35) 季代 : イヤホーン、とって。

茂 : 大きい声出すなよ (ととる)。

季代 : かして。

茂 : なんですよ?

季代 : いいから (ととる) (\*ね/\*よ)。

先行研究には他に永田(1999)があるが、これは白川(1995)で区別された「理由を表すカラ」と「理由を表さないカラ」を関連性理論の枠組みにおける発話解釈の観点から考察し、その連続性を論じたものである。

以上、カラの先行文献について概観した。カラには「理由を表すカラ」と「理由を表さないカラ」があり、理由を表さないカラには3つの用法が認められた。また、文末で使われるカラのモダリティは説明、関連づけであることが指摘された。

### 3-2-2 理由を表さないカラとケンの置き換え

理由を表さないカラについては前節で詳述したが、本節では理由を表さないカラの用法をケンに置き換えることができるかについて考察する。

#### ①「条件提示」用法

(36) すぐ返すケン、お金貸してくれる?

(37) 一緒に行ってあげるケン、早く謝ったほうがいいよ。

#### ②「お膳立て」用法

(38) 10時30分の汽車に乗せたケンよろしくお願ひします。

(39) 英語の文ば読むケン、注意して聞いてよ。

### ③「段取り」用法

(40) 夜明けの四時に、タクシーが迎えに来てくれるケン、それに乗って、途中、赤羽駅で彼ば降ろして、そのまま、大宮駅まで…

(41) (料理の手順) すぐ沸騰してくるケン、そしたら、根元の方からハウレンソウばお湯に入れて、1分ぐらいで取り出すとたい。

理由を表さないカラの3つの用法はそれぞれ、ケンに置き換えることができ、ケンも同様の用法をもつことがわかった。

上の用例では全て普通形接続とした。年齢層が高い熊本方言話者は「ですケン」「ますケン」といった使い方をし、目上の人に対しても使用するが、若年層は目上の人に対して丁寧体で話す際は、共通語のカラを使うことが多い。

白川(1995)はカラの文末用法についても言及している。「S2、S1カラ。」となる倒置文、S2が表面に現れない言いさしの文は「条件提示」、「お膳立て」の用法に見られ、これらも、ケンに置き換えることができる。

(42) 帰りなさい、明日。こっちは大丈夫だカラ。(白川 1995 P201)

(43) 帰んなっせ。こっちは大丈夫だケン。

(44) 泣かないでください。怒ってませんカラ。(白川 1995 P201)

(45) 泣かんでよ。怒っとらんケン。

(46) (妻が夫に)「お尻拭き」取って。後ろにあるカラ。(白川 1995 P202)

(47) (妻が夫に)「お尻拭き」取って。後ろにあるケン。

(48) (借金を友人に頼む場面で) 倍にして返すカラさ。(白川 1995 P202)

(49) (借金を友人に頼む場面で) 倍にして返すケン。

(50) おやつ、アイスクリームが冷蔵庫に入ってるカラな。(白川 1995 P205)

(51) おやつ、アイスクリームが冷蔵庫に入とるケンね。

白川(1995)は文末のカラについて「いったんS2で行為要求をしておいて、その後S2を補足的に追加する」といった特徴を挙げており、これが「懇願するニュアンス」や聞き手が行為を実行するための「情報提示」となることを指摘している。しかし、聞き手のどのような行為を要求しているのか表示されない例として次のようなものも挙げている。

(52) 私、今井さんとは絶対に別れないカラ！(白川 1995 P207)

(53) 私、今井さんとは絶対に別れんケン。

(54) 今度の日曜、一日ぼくいないカラね。(白川 1995 P207)

(55) 今度の日曜、一日私おらんケンね。

これについても、白川(1995)は「聞き手が何かをするために参考になる情報として提示している」と解釈している。しかし、次のような文で、聞き手の行為を想定しているとは言えず、これらの説明は当てはまらないように思える。

(56) もう、知らないカラ！

(57) もう、知らんケン！

しかし、それでも、カラとケンの置き換えは可能で、このような説明の難しい用法においてもカラとケンは同じ用法を持つと指摘される。ただ、この発話については

(58) もう、知らない！

のように、文末詞をつけなくても発話が可能であることから、今後、さらに考察を進める必要がある。

以上、見てきたように、カラには理由を表すカラ、理由を表さないカラがあり、理由を表さないカラには3つの用法があった。さらに、接続助詞としての用法だけでなく、終助詞的な用法も多数認められた。そして、これらの用法のすべてが、ケンに置き換え可能であることがわかった。

### 3-3 方言教材への応用

以上、カラの用法を中心に分類し、これがケンで言えるかどうか、考察した。その結果、カラはケンに置き換えが可能であることが分かった。このことを踏まえ、熊本に住む外国人のための方言教材「話してみらんね さしより！熊本弁」では、ケンの使用法について、以下のように記述している。

「けん」は熊本だけでなく、西日本でよく使われる方言です。共通語の「から」と大体同じ使い方をします。

[理由を表す]

- 1) 安かけん、見に行かん？
- 2) 頭の痛かけん、帰る。
- 3) 明日返すけん、500円貸して。

「から」と同じように「けん」も理由を表すときによく使います。使い方は上のように、文の途中に出てきたり、下の例のように文の最後に出てきたりします。

- 4) A: 土曜日、ドライブに行かんね？

B: 土曜日はバイトのあるけん・・・

- 5) 500円貸して。明日返すけん。

また、「けん」は次のように、理由を表さない使い方もあります。

[場所の説明などをする時に前置きとして使う]

- 6) そんな先に花屋のあるけん、そこから、10分ぐらいかな。
- 7) 電話の横に、鍵がかけてあるけん、それば使って。

[相手(あいて)からの返事を求めない、宣言するような言い方]

- 8) (医者から止められているのに酒を飲んだ父に対して母が言う)

もう、知らんけん！

- 9) (出かける準備に時間がかかっている弟に対して)

先に出るけんね。

[情報の提供]

- 10) (子供に向かって)

おやつは冷蔵庫にあるけんね！

- 6) から 10) は理由を表しているとはいえません。

これらの記述は、ケンの理由を表す用法と理由を表さない用法について学習者用に解説したものである。非熊本方言話者にとっては共通語からの用法説明が有効であると考え、このような形をとった。

### 3-4 今後の課題—ケン

以上、共通語カラと熊本方言ケンの共通性について考察し、方言教材での使用例を紹介した。しかし、カラとケンは全く同質というわけではなく、ケンの用法の中で、カラに置き換えられないものもある。次のようなケンはカラに置き換えることができない。

(59) あら、雨の降りよるケン。(あ、雨が降ってるよ。)

(60) (皿に汚れが付いているのを見て)

汚れの落ちとらんケン。(汚れがおちてないよ。)

(61) ちょっと、ゴミのついとるケン。(ゴミがついてるよ)

これらの例は共通語ではヨに置き換えられるが、次のようなヨはケンに置き換えることができない。

(62) A: すみません、受付は… (どこですか)

B: あそこですよ。

B’: \*あそこだケン。

このような、カラに置き換えられない用法については今後さらに用例を収集し、分析を進めたい。

## 4. おわりに

今回、教材化したのは比較的分かりやすい用法である。本研究では共通語に置き換えて使用できるかといった方法で方言の分析を試みたが、方言の用法の記述には、まだ用例の収集を進める必要があり、共通語に置き換えることのできない用法もあるかもしれない。共通語と方言のどの語がどの語の用法を補完し、あるいは包摂しているのか、さらに詳細な研究が求められる。

\*本稿で取り扱った熊本方言の文例は、(データ)としたものは馬場(2005)から、それ以外は熊本方言話者である筆者が作成し、熊本方言話者数人に確認をとった。

注)

- 1) 前田(1999)に「あれは船でしたタイ」という用例が出ているが、熊本方言ではこのような使い方はしない。
- 2) サは富樫(2004)の分析では使用例のほとんどが間投詞的用法で、典型的な文末述語に付いた用法は談話資料には見られなかったという。文末に使われるサの用例は外国人の発話を翻訳した新聞資料や小説資料に見られ、このことから富樫(2004)はサを男性語としての役割マーカールととらえている。
- 3) 富樫(2004)で引用されている例文で、出典は吉行淳之介『樹々は緑か』
- 4) 共通語のダロウは熊本方言では「ド」に置き換えられることが多い。
- 5) 坪内(1995b)は共通語のダが4種類のモダリティ要素として機能しているのに対し、方言においてはこれが異なる語形で使い分けられていることを指摘している。

## 参考文献

- 庵 功雄ほか(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 井上優(2002)「モダリティ」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』p133-150 (科学研究費補助金研究成果報告書)
- 井上優(2006)「第4章モダリティ」『方言の文法』p137-179
- 神部宏泰(1992)「肥筑方言における「バイ」「タイ」文末詞の生態と表現特性」『研究叢書 108 九州方言の表現語的研究』p38-53 和泉書院
- 許 夏玲(1997)「文末の「カラ」について—本来的用法から派生的用法へ—」『ことばの科学』第10号 名古屋大学総合言語センター
- 金水敏・田窪行則(1998)「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」堂本修司他『音声による人間と機械の対話』256-271 オーム社
- 坂口至(1998)『長崎県のことば』平山輝男他編集 明治書院
- 白川博之(1991)「「カラ」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要第2部』第39号
- 白川博之(1995)「理由を表さない「カラ」」『複文の研究』くろしお出版
- 鈴木義和(2000)「いわゆる「理由を表さないカラ」について」『神戸大学文学部紀要』27
- 坪内佐智世(1995a)「福岡市博多方言の不変化詞タイ・バイの意味記述」『九大言語学研究室報告』16
- 坪内佐智世(1995b)「福岡市博多方言における「だ」相当助詞に現れるモダリティ」『Kansai Linguistic Society』15 p25-35 関西言語学会
- 高梨信乃(1966)「条件接続形式を用いた<勧め>表現—シタライイ、シタラ、シタラドウ—」『現代日本語研究』第3号 p1-15 大阪大学現代語講座
- 富樫純一(2004)「終助詞・間投助詞の「さ」に関する覚え書き」第74回関東日本語談話会資料
- 永田良太(2000)「接続詞カラの用法間の関係について—発話解釈の観点から—」『日本語教育』107号 日本語教育学会
- 中野伸彦(1995)「終助詞「さ」「な」の働きについて」『築島裕博士古希記念国語学論集』1063-1085 汲古書院
- 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4 モダリティ』
- 蓮沼昭子(1995)「対話における確認行為—「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田義雄編『複文の研究』p389-419 くろしお出版
- 馬場良二(2005)「現代熊本方言話者の発話分析」『熊本県立大学文学部紀要』第11巻
- 藤本憲信(2002)『熊本菊池方言の文法』
- 前田明彦(1999)「長崎方言におけるタイとバイの意味的差違」『長崎大学留学生センター紀要』第7号 p83-103
- 三宅知宏(1996)「日本の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89号 p111-122 日本語教育学会
- 宮崎和人(2000)「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106号 p7-16 日本語教育学会
- 宮崎和人(2005)『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求—』ひつじ書房